

森田達也、明智龍男 著

死を前にしたひとのこころを読み解く 緩和ケア÷精神医学

兼本浩祐

この本の著者の1人、明智龍男先生のお話は直接何度か聞かせていただき、同じ地域で働いていたこともあって、そのお人柄も良く知っているつもりでいたのだが、この本を通読して改めて思ったことがある。

まずは、「変えられるものを変える勇気を、変えられないものを受け容れる冷静さを、そして、変えられるものと変えられないものを区別できる知恵を」というニーバーの祈りのことである。以前、明智先生からそのお話を聞いて感銘を受け、ニーバーの本も購入したが、この言葉にどうして自分が惹かれたのか、今回の本を読んで改めて感ずるところがあった。この言葉は、精神科医が身体に関わろうとする時に、常に突きつけられる困難を集約している。死はもっとも端的に身体の問題であるのはいうまでもないが、たとえば評者が専門とするてんかんも、時に抗いがたい身体の問題として現れる。死は究極の変えることができない私たちの身体の宿命である。てんかんは多くの場合は幸いなことに「変えられる」が、しかし時には身体の論理が私たちを圧倒し、その時点では人の力では抗うことができないてんかんの発作も存在する。目の前にある苦しみは、変えることができるものなのか、それとも変えられないものなのかを見誤ることは許されない。しかし神ならぬ私たちはそれでも時として見誤るのである。だから、どうか間違えませんかようにと祈らざるをえない。

もし精神科医が心の病は脳に原因があると自分は考えているのだから、自分は身体に関わっているのだと思っているのだとしたら、それは錯覚である。『緩和ケア÷精神医学』は、精神科医が身体に関わるということがどういうことなのかを終始穏やかで控えめな口調ながらも、直面化させてくれる迫力が

ある。すべての精神科医が身体に関わるが必要だとは思わないが、もしもニーバーの祈りを必要としない現場にいたのであれば、その精神科医は『緩和ケア÷精神医学』で問題となっているような身体には関わらない臨床を選んでいるのだということは知っておいても良いように思う。

本書を読んで改めて思ったもう1つは、自分がもし死を宣告されたときに、自分の傍らにいてもらっても良いと思えるような精神科医は、どうして、明智先生のように自らのことを無力で無価値だというたたずまいになるのかということだった。本書のもう1人の著者である終末期に関わる身体科医の森田先生が、「変えられるもの」は徹底して変えてくれるであろうという大きな信頼のもとでのことではあるとはもちろん思うのだが、しかし、究極の「変えられないもの」の1つである私たちの身体の死を目の前にして、しかも私の身体はあなたの身体ではないのだから、決して死にゆく人の気持ちは分からないという孤独を前にして、この無力な私があなたに何ができるのだろうか。死にゆく人に教える知恵など精神科医が持ち合わせているはずはないからである。だから「知」はそういう時に常に向こう側にある。おそらくそれは、サイコoncロジーの領域に限らず、すべての精神科医がいくぶんなりかは共有しなければならない姿勢なのではないか。本書は改めてそう私たちに教えてくれている。少なくともすべての精神科医が一読すべき本であることは間違いない。

(愛知医大名誉教授)

● A5 264頁 2024年

定価：2,750円(本体2,500円+税10%)

医学書院刊